
「力」の作り方

岡崎一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「力」の作り方

【Nコード】

N6363Y

【作者名】

岡崎一

【あらすじ】

超能力が珍しくなくなった少し先の未来。しかし、「超能力」は皆が想像してたモノではなく、皆が同じの小さな能力だった。そんな、珍しくも何ともないモノに目覚めた主人公「上谷蒼かみや そう」とその周りの人々のお話

エピソード（前書き）

使い古された設定の塊みたいな作品です。結局俺の自己満足なのでそれでも読んでくれると言っ心優しい方、読んで頂ければ幸いです。あと、m a cのテキストで書いているので表示が変かもしれませんが指摘いただけたら随時修正していきます。

エピソード

俺「上谷 蒼」（かみや そう）がそれに気が付いたのはごく最近だ。

ある日、本を読みながら紅茶を飲んでいたら少しの先にあるカップが動いた。

始めは気がつかなかったのだが、良く見たら机の水滴のあとが不自然だったのだ。

不思議に思っていたら、夕食の時に家族気が付いた
どうやら、みそ汁のお椀が動いて手元に来たらしい。

まあ、俗に言う超能力だ。

しかし、最近は珍しくは無い。昔みたいに超能力がもてはやされることも無い。

なんだか、人間の進化だかなんだかで出来るようになったらしい。
詳しくは知らん

だが、毎日そこら中で超能力バトルが起ってるわけではない。
しつかり法律で規制もされてるし、それに一番の理由は大抵の人が
手の先から2〜3cm程度ものを動かせる程度の能力だからだ。

まあ、稀にそれ以外の能力を使う人もいるらしいが。

そんなわけで、家族も大して喜びもせず、コレと言って何も変わらなかつた。

1 - 1 変化

『どんな超能力でも何か鍛えればスゴい力になるんじゃないか。なんて、力に目覚めたほぼすべての人間が思うことだろう。』

まあ、自分も例外に漏れることはない。

そのせいで、友人がいなくなった。

「おい、上谷帰り何か食って行かないか？」

「やめとく、帰って鍛えるわ」

「ああ、そうすつか・・・」

呆れ気味にそう返したのは、俺の数少ない友人（唯一の）である森崎だった。

この森崎は、とても良く出来た人間で力に目覚めて意味不明な行動をしてる俺と仲良くしてくれる。さらに、なかなかのイケメン、そしてクラスの人気者ときたもんだ。

チート過ぎる・・・

「上谷じゃあな」

「おう、また明日」

そのチート野郎の誘いを断って自宅に帰った。

早速、いつもの特訓に入る。

やることは簡単、家の庭に置いてある約3kgの砂袋に力を使うだけ。少し前は、もっと色々したのだが今はこれを地道にやっている。

最近気がついたのだが、超能力をたくさん使えば運べる重量が増

えるみたいだ。この3kgの砂袋を動かせるようになったのもつい
一昨日のことだ。

その特訓を四時間程していたら、夕飯に呼ばれた。いつもと変わ
らなかった。

翌日、その日は珍しく森崎とゲーセンに行ってから帰宅した。

「お前、いつもゲーセンは来るよな」森崎が少し、不満そうに言った

「いや、だって飯はいつも奢るっていいだすじゃん」

「いいんじゃない、俺がいろいろ言ってるんだから」

「気を遣うから、嫌なんだよ」

そこで、森崎は少し黙った・・・

「うん、なら今度から割り勘でいこう」

「金ないからパス」

「結局かよ！」

そんな、いつも通りの会話していた時だった。

ダァァン！！

乾いた火薬の音がした。映画やテレビでしか聞いたことのない爆発
の音だった。

「「え？」」

俺たち二人は揃って振り返った

1 - 1 変化（後書き）

なかなか、小説って書くの難しいな・・・
がんばります・・・

1 - 2 混乱

見えたのは、真つ赤な炎だった。

次の瞬間大量の破片コチラに牙を向いた。

俺は、反射的に力を使った。

ピタリと不自然な動きで飛んできた破片が止まった。それから、バラバラと落ちて行く。

「森崎！大丈夫か?!」

「え？ああ、うん」

よく見ると森崎にも、怪我ない。

おかしい、俺は能力があつたからなんとかなつたんだぞ・・・まさか、こいつも？

「おい、森崎おm「いやあ、すいませんな」

胡散臭そうな七三分けの男が近づいてきた。

「いやあ、ほんまにすんません。まだ、民間人がいると思ってなかつたもんで」

「は、はあ・・・」

「怪我はありませんか？大丈夫ですか？うん、大丈夫ですな じゃ

あ、このことは内密におねがい

します、と男が言いかけたときそれは起つた。

ピシッ

「え？」「本日二度目のハモリだ

目の前の男が一瞬で凍り付いたのだ。

それは間違いなく、『超能力』だった。

「君たち！こつちだ！」

と、謎のマッチョマンに腕を引つ張られた。そのまま、ずるずると引つ張られて行く俺たち二人。

「奥に入つてくれ！」

そのマッチョマンが、俺たちを置いて今来た方向へ走り出した。

その瞬間、また爆発が起きた。

もう、何が何やらさっぱりだ。

しばらくすると、顔を煤まみれにしたさっきのマッチョ野郎が帰ってきた。すると、突然通信機で何か話し始めた。

「すまない、少し着いてきてくれないか？」

その男は、まだ混乱している俺たちの返答を聞かずに車に乗せた。

かなり荒い運転の黒いワゴン車に揺られこと20分。

今度は、瞬間移動した。

「はい？」

また、わけのわからないことで混乱する俺たち二人。

そこは、とてつもなく広いコンクリートの部屋だった。柱もない本
当に何も無い運動場くらいの広さの部屋だった。

そんな馬鹿みたいに広い所で惚けている俺と森崎。

すると、一人の男性が入つて来た。さっきの男ではなく茶髪の細身の男だった。

「すいませんね、巻き込んでしまつて。」

「え、は、はい」「う、うん」同時に答える俺たち

「どこか、痛い所はないですか？」

少しの間、顔を見合わせる俺と森崎。そして、森崎が答える。

「いや、大丈夫です。それより、早く僕たちを帰してください」

森崎、お前すげえな・・・

「おや？状況の説明は求めないのですか？」

「いや、知りたいですが、それより家に帰りたいのです」

「そっちの一人の君はどうです？」

いきなり俺に振るか・・・

「そいつの意見と同じですが、後で連絡する手段をください」

「どうして？」

「説明を聞きたいのです」

「そうですね、わかりました。では、少しの間ここでお待ちください」

案外あっさりと連絡方法をくれるみたいだ。

それから一時間程して、解放された。最後に「約束していた、連絡先です。」と言って小さなメモを渡された。

解放されて、帰路に着いてから俺たちは一言も話さなかった。

「じゃあ、ここで」

「うん、またな」

そうして、それぞれの家に帰った。

1 - 2 混乱（後書き）

ほんとに、文字で思い浮かだこと表現するのって難しいですな・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6363y/>

「力」の作り方

2011年11月20日19時31分発行